

No.106 金沢 健一 —無題—

Kenichi Kanazawa

北川フラムさんのコラム / 1997 (平成9) 年 10月 15日付 立川市市報記事より

ギャラリーロードと呼ばれる車止めがずらっと並んだ場所に、金沢健一の作品は設置されている。長方形を四つに分割し、それを組み合わせた作品だ。

鉄やステンレスの立方体の組み合わせによってシンプルな作品をつくっているが、重要なのはプロポーションであり、自分なりの理想的な黄金比を探し求めたい、というのが作家の願いである。また、公共空間におけるアートは、人々に発見や、驚き、潤いといった何かを与えたいと考えているようだ。

現在、市民を中心としたボランティアがアートガイドを行っている。その説明の中で、この作家の言葉、「アートはそこに生活する人々を育て、人々に育てられる」を引用しているのが印象的だった。

作家のメッセージ / 日本住宅公団 (現 : UR 都市機構) 「ミニ通信」より

町づくりの建築にアートが導入されることが当たり前になっている現在、アートを置くことが文明を担うシンボルになっているかのように、町にはモニュメントが乱立しているように思える。それらの中で入念な計画の元に置かれたものがどれだけあるだろうか。アートの役割というものが十分に検討されたことがあるのだろうか。今後も人々に愛され、どれだけのものが残っていけるのだろうか。(もちろん物理的には残るのだが) 町の片隅で忘れ去られた無残な姿を見るのは悲痛な思いがする。(それは作品の力にもよるのだろうか) アートは一時的な流行として消費され、その本来の意味、役割も忘れ去られるのか。

公共空間におけるアートは常に不特定多数の人々の中に存在し、偶然突然の出会いを通して発見、驚き、潤いといった何かを与えたいと考える。そのためにアートの質や内容、そこに置かれる意味、空間などの入念な計画が必要となる。

この前提のもとにアートがうまく機能した時、アートはそこに生活する人々を育て、人々に育てられる。アートが街に生きることは、同時に町が生きる事、人々の街への愛着にほかならないだろう。その時アートは町に根付くことになる。

ファール立川アート計画が、このような意味においてアートが持つ役割の良き手本になるべくその第一歩を踏み出す。

機能のアート化、アートの機能化といったコンセプトは、作品と町を一体化し、人々とのコミュニケーションのきっかけになるだろう。

いずれにしても長い時間と努力を重ね多くの問題点を克服することでアートは根付き、町の誇りになるだろう。